第八回育英生入選論文

カンボジアで

真言宗僧侶　渋井　修

カンボジアに最初に行ったのが三年前、そしてカンボジアに住んで二年がたちました。この三年間にカンボジア国内にいろいろの変化がありました。三年前のカンボジア、空港から町に行く道すがら、人々の浮き足立ったような軽い足取りが、何よりも印象的でした。それもそのはず、その年の一月にはベトナム軍がカンボジアから撤退して、四月に共産主義を捨て、国名を新たにして、私有財産と土地の所有を政府が認めたのでした。それ以後、五十歳以上でなければ得度して僧侶になれなかった法律も改正され、地区長の許可があれば誰でも年齢に関係なく得度できるようになりました。カンボジアが解放された二年後（一九八一年）に全国の僧侶の数が二千人だったと言われていましたが、三年前には六千人になり、一昨年には八千人になり、そして昨年には二万一千人にまで増えました。商業活動の面でも、商店の大きさに比べ品

薄であった二年前に比べると、今は店内にもたくさんの商品が並べられ、活気ある町に変わりつつあります。

プノンペン近郊の虐殺現場に供養に行った時には、何ケ所もの検問所を通り抜け、橋の手前と向う側には土嚢を積んだ監視所があり、兵隊が常駐していましたが、昨年には数ケ所の検問所が撤去され、監視にあたる兵隊の数も減りました。そして昨年のパリ和平会談で、現政権と反政府三派が停戦協定に合意し、やっと平和に向けての第一歩がふみだしました。しかし二十年にわたる内乱で国土は傷つき、人心にも言い知れぬ深い傷跡を残したことも確かです。

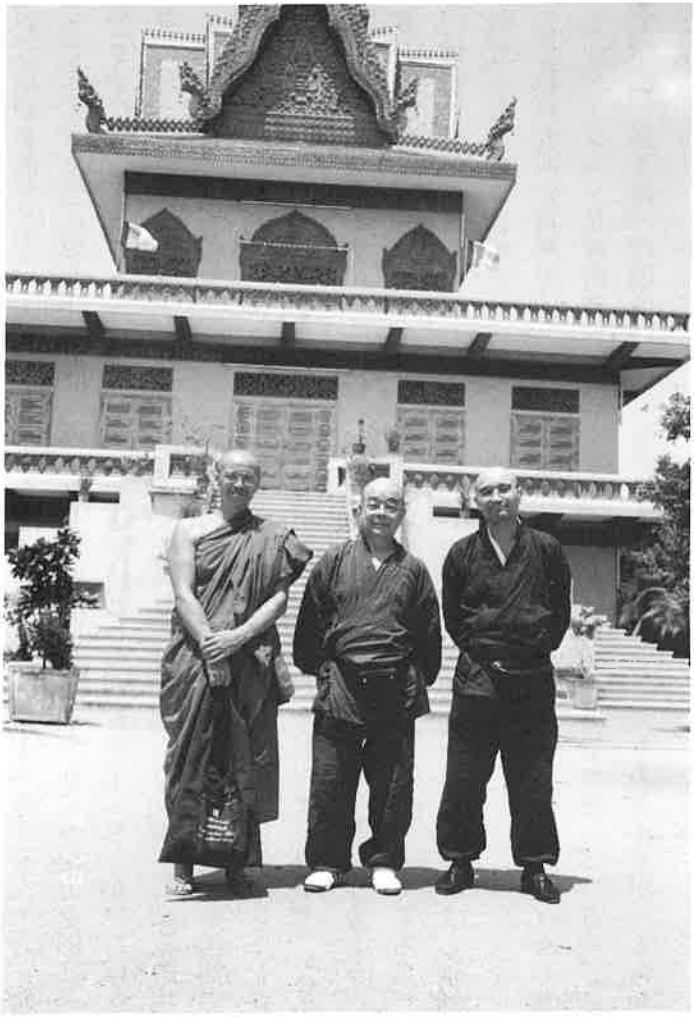
この二年間に、虐殺された人々の供養に十ケ所程行ってまいりましたが、地方の一人歩きはゲリラと地雷の危険があるとのことで許可が下りません。昨年の五月に開いた日本語教室も、まだ正式には政府の許可が下りず、黙認というかたちでやっているのが実情です。この国では外国人が何かしようとすれば、必ず政府の許可をとらなければなりません。そしていつもその回答は否定的なことが多く、自分の思ったことが思ったようにできません。

ポルポト時代に多数の知識人、僧侶が殺され、外国人の目から見れば人材不足が一番の深刻な問題です。現在カンボジア国内に僧侶が戒律やバーリー語を学ぶ学校が二ケ所ありますが、実際に学べる人数は二百人程度です。僧団内の指導者不足、教室の確保、経典不足など、僧侶の数が増えたぶんだけ、内面にかかる問題も増えてきました。

最初は虐殺された人々の供養にと入って来たカンボジアでしたが、現状を見れば見るほど、それだけではだめなことに気がつきました。それではカンボジアの復興のために日本人僧に何ができるであろうか。二年前に気がついたこと

は、この国には日本語の本もなければ、日本語を教える教師もいないということでした。すぐさま日本からカンボジア語、日本語の本を取りよせ、庫裏を改築して日本語教室を開く準備をしました。将来的にはこの国にも必ず日本語が必要になる時が来るであろうから、今のうちに

プノンペン・ウナロム寺院にて



その人材を育てようというのが目的でした。しかし少しずつ欲が出てきて、できるものなら生徒の何人かは日本に留学させたいと思うようになりました。現在二クラスあって、十一歳～十四歳までの子供のクラスが十三人、十八歳～二十七歳までの大人のクラスが十二人います。日曜を除く週六日、午後五時半～七時までと七時半～九時まで、一時間半ずつ教えています。

虐殺された人々の供養と日本語教室を開くことで、私自身のここでの活動は十分であろうと思っていたのですが、最近になってカンボジア仏教会から、プノンペン仏教研究所の再興を望む声があがりました。このプノンペン仏教研究所とは、付属機関として学校、図書館、印刷所をもつ国内では中心的な存在であり、一番権威のある仏教研究所であり、教育機関でした。しかしポルポト時代には建物が破壊され、図書が焼かれ、印刷機もどこかに持ち去られてしまいました。この仏教研究所を再興するために、日本の各仏教会、団体に資金面での協力を願うべく、連絡要員として私が御手伝をしなければならなくなりました。しかしカンボジア仏教の現実を見るならば、私が御手伝することは当然のことであり、また私しか日本とカンボジアを往復してその任にあたる人がいないのです。大きな任務を抱えこんでしまいましたが、カンボジア仏教の復興を考えるならば、どうしても若い僧侶の教育、経典の復刊が急務であることは疑いの余地のないことです。

私はこの国で三つのことをしなければならなくなりました。自分の力量を越えているのではないだろうかと思うこともありますが、とにかくやらなければならないでしょう。そして、いよいよ本腰をすえてこの地に根をはり、全力投球しなければならなくなったようです。